

“Unfurled” 再考

床尾辰男

先頃開催された1999年度日本シェリー研究センター年次大会におけるシンポジウムは、初期の詩「モン・ブラン」をめぐってのものであった。私はレスポンス役をつとめ、この詩に含まれる解釈上の問題点のいくつかについて自説を披露した。シンポジウムそのものにおいては時間不足のため、発表者相互間、発表者とフロアとの間のやりとりが十分できなかった。しかしこの日の懇親会の席が、はからずもシンポジウム第2部の場と変じ、活潑な意見交換がなされたのは、望外の快事であった。この席で、私がシンポジウムで問題にした個所のひとつ、“Has some unknown omnipotence unfurled/ The veil of life and death?” (ll. 53-54) の“unfurled”について、これはやはり、私の主張するように「引き上げた」ではなく、字義どおり「引き下ろした」でよいのではないか、との意見が表明された。この時は、言葉の真の意味でのシンポジウムが進行中であり、杯を傾けながらの談義であって、手元にテキストを置いてのやりとりではなかったもので、その場は、もう一度よく考えてみましょうということだけりをつけた。その後、約束どおり、このことについて多少考えてみた。その結果を、今ここで報告することにした。

問題の個所は、アルヴの峡谷を見下ろしていた詩人がふと頭を上げて聳え立つモン・ブランを見、恍惚境に誘われる様子を描いている。詩人は言う——“I look on high;/ Has some unknown omnipotence unfurled/ The veil of life and death? or do I lie/In

dream, and does the mightier world of sleep/Spread far around and inaccessibly/ Its circles?” (ll. 52-57) シンポジウムにおいて私は、第3詩節冒頭のこの部分について、言葉遣い、詩のリズム、第2詩節とのつながり具合などから判断して、ここでは、生死を隔てるヴェールが上がって永遠界が垣間見られるという風に解釈するしかないと述べた。いわば主観的な根拠に基づく解釈を提起したのである。はたしてヴェールは上がるのか下がるのか、別の角度から今一度この問題を考

えてみよう。問題解決の鍵となるのは、シェリーにおいてヴェールがどのような意味を持っていたのかを理解することであるように思われる。具体例に則して検証してみたい。

周知のとおりヴェールは、シェリーの作品に現われるさまざまなイメージないしシンボルの中でも、特に重要なものである。シェリーが用いるヴェールのイメージ（シンボル）には一貫した意味があることは、Peter Butter (*Shelley's Idols of the Cave*, 1954) やNeville Rogers (*Shelley at Work*, 1956) の研究が既に十分明らかにしている。一般的にヴェールは、可視の世界と不可視の世界、既知の世界と未知の世界を隔てるものという意味を持つ。シェリーにおけるヴェールも基本的にはこの範疇に属する。*Alastor* における「ヴェールをまとった乙女」(“veiled maid”)を覆うヴェールはその一例であり、‘Mont Blanc’に現われる「人の手が刻んだのではない像を覆い隠すヴェール」は、もうひとつの例である。しかしやがて、ヴェール

はよりシェリーの意味を帯びるようになる。それは生の世界と死の世界、現象界と永遠界、仮象の世界と実在の世界の間において両者を隔てるものの象徴として用いられるようになるのである。'Mont Blanc' 執筆の時点までには、ヴェールが表わすこのような意味は確立していたようである。何よりも、ヴェールがこの詩において“The veil of life and death”と呼ばれていることがその証拠である。以後シェリーの作品には“(the veil of) life and death”という表現がしばしば見られるようになる。この一句は「生と死とを隔てるヴェール」という意味だけではなく、「生でもあり死でもあるヴェール」という意味も持っているらしい。*Prometheus Unbound* に次の1行が見出される：“Death is the veil which those who live call life” (III, iii, 113)。「死とは、生きている者たちが生と呼ぶヴェールなのです」——つまり、同じ一枚のヴェールでありながら、それは生きている者——ヴェールのこちら側（現世）にいる者——から見れば生であるが、ヴェールの向こう側（永遠界）にいる者から見れば死であるようなヴェールなのである。さらに言うなら、ヴェールのこちら側にいる者にとってはヴェールのこちら側の世界が生の世界で、ヴェールの向こう側は死の世界であるが、ヴェールの向こう側にいる者にとっては、そちら側が生の世界で、反対側（現世にいる者にとっての生の世界）が死の世界ということになるだろう。

このヴェールが引き開けられるか引き裂かれるとき、われわれは永遠界ないし実在界に参入するのであるが、現世に生きる者にとってそれが可能になるのは、死あるいは眠り（ないし夢）を通してのみである。われわれは死ぬことによって、生死を隔てるヴェールを通り抜け、その向こうにある永遠界へ到達できる。*Prometheus Unbound* 第1幕において「大地」は、死後の世界にはこの世に存在するものすべての影があって、この世に存在するものは死ぬとその影と結びついて、以後は離れることがなくなる、と説く (I, 195-202)。(なお、ここで「大地」は、この世に存在するものが実体で、死後の世界（永遠界）

にはその影が存在するかのような言葉遣いをしているが、実際はその逆で、この世に存在するものはすべて、永遠界に存在する真実在の影にすぎないのである。)あるいは、*Queen Mab* の出だしに “How wonderful is Death, / Death and his brother Sleep!” とあるように、一種の死と考えられている眠りの中においても、永遠界を垣間見ることがある。再び「大地」が言う——“Death is the veil which those who live call life: / They sleep, and it is lifted” (III, iii, 113-114)（「死とは生きている者たちが生と呼ぶヴェールなのです。眠ると、そのヴェールが引き上げられます」）。そしてヴェールを突き抜けた向こう側に存在する永遠界は、“some sublimer world”（‘Hymn to Intellectual Beauty,’ l. 25）、“world divine”（*Epipsychidion*, l. 597）、“some world far from ours”（‘To Jane: The keen stars were twinkling,’ l. 22）などと呼ばれる。*Prometheus Unbound* 第2幕末尾のエイシアの歌は、彼女の魂が老年、壮年、青春、幼年と人生を逆にたどって、遂



Compositions from Shelly's *Prometheus Unbound* : twelve engravings in outline by Sir J. Noel Paton. Plate II. Act I.

には永遠界に至ると語る——“Through Death and Birth, to a diviner day” (II, v, 103) ——が、ここの“Death and Birth”は“(the veil of) death and life”のことと考えられるので、この1行は結局「生死を隔てるヴェールを突き抜けて、聖なる世界に至る」という意味になるだろう。

Prometheus Unbound には、もうひとつ、眠り、ヴェール、ヴェールの彼方の世界の関係を集約的に表現した一節がある——“To the deep, to the deep, /Down down! /Through the shade of sleep, /Through the cloudy strife /Of Death and of Life; /Through the veil and the bar /Of things which seem and are, /Even to the steps of the remotest throne” (II, iii, 54-61)。

「眠りの陰を通して」=「眠りの世界の中で」

(“Through the shade of sleep”)、「生死を隔てるヴェールを苦勞して通り抜け」 (“Through the cloudy strife /Of Death and Life”)——「生の世界 (“things which seem”) と死の世界 (“things which are”) を隔てるヴェール (“the veil and the bar”) を通り抜け」——「実在界の奥深くにある玉座の階きざしに至るまで」 (“Even to the steps of the remotest throne”) 降りてゆけ、と促す精霊たちの声がエイシアとパンシアに聞こえてくる場面である。

このように、シェリーにおいてはヴェールが生の世界と死の世界(すなわち現象の世界と実在の世界)を隔てており、そのヴェールが取り除かれたときわれわれは実在界ないし永遠界を見ることができるのである。以上をふまえて‘Mont Blanc’の問題の個所についてもう一度考えてみよう。“Some say that gleams of a remoter world /Visit the soul in sleep, -that death is slumber, /And that its shapes the busy thoughts outnumber /Of those who wake and live. -I look on high; /Has some unknown omnipotence unfurled /The veil of life and death? or do I lie /In dream, and does the mightier world of sleep /Spread far around and inaccessibly /Its circles? … /Far, far

above, piercing the infinite sky, /Mont Blanc appears, -still, snowy, and serene-” (ll. 49-57, 60-61) 「ある遙かな世界からさす微光が／眠る魂を訪れる」とあるが、これは‘Hymn to Intellectual Beauty’において〈「より崇高な世界」から「目には見えない力の畏怖すべき影」が、「目には見えないが」この世を訪れる〉とうたわれるのと同じ思いをうたっている。つまり、眠っている間に、あるいははっきりそれと意識できない形で、永遠界が現象界に姿を現わす、というのである。そして、「死は眠りであり／死の世界には、目覚め生きている者の精神をよぎる／せわしげな想念よりも数多くのものが存在する」とは、上で言及した〈死後の世界には、この世に存在するすべての生命と想念の影が存在する〉という「大地」の説明のもとになっている考えである。このような前置きをした上で詩人は、頭を上げて、聳え立つモン・ブランを見たときの思いを語る——「未知の全能者が／生死を隔てるヴェールを“unfurl”したのか、それとも／私は夢を見ていて、眠りの大いなる世界が／到達し得ないほど遙か彼方までその輪を広げているのか」と。つまり詩人は、永遠界が自らその姿を開示したのでなければ、自分は死んだか、眠って夢を見ていたかどうかには違いがないと言っているのである。上述のように、現世に生きる者が永遠界に参入できるのは死か眠りを通してのみである。モン・ブランを見上げる詩人は、明らかに永遠界を目の前にしているように感じている。ヴェールが下りてきて、詩人がそのヴェールに描かれた現象界 (“the painted veil which those who live /Call Life” - ‘Sonnet: “Lift not the painted veil,”’ ll. 1-2) を見ているのではない。「遙か上方に、無窮の天を貫いて」聳え立つモン・ブランは、「遙かな世界」(永遠界)に属する存在だからである。やはりヴェールは「引き上げられた」のである。

(京都府立大学文学部教授)